



道南技術士会 CPD 研修会

洞爺湖自然環境と伊達・白老を巡る歴史探究ツアー

技術士補（建設部門） 金 谷 英 俊

1. はじめに

身近な歴史遺産をたずねて先人の知恵と努力を知る研修ツアーも今年で5回目になります。前々回から2回続けて青森県に渡り、青函圏の土木遺産と歴史を探索しました。今回は函館から比較的近い地域である洞爺湖・伊達・室蘭・白老方面を巡りました。

2. 概要

日程：2009年11月7日(土)から

8日(日)までの2日間

1日目：①洞爺湖ビジターセンター・火山科学館

②善光寺

③伊達市開拓記念館

④北黄金貝塚

⑤ホテルゆもと登別に宿泊

2日目：⑥アイヌ民族博物館

⑦白老元陣屋

⑧チキウ岬（地球岬）

⑨白鳥大橋

講師：函館工業高等専門学校 中村和之 教授

専門は歴史学（アイヌ史・北東アジア史）

3. 研修内容

○ 洞爺湖ビジターセンター・火山科学館

2007年4月にオープンした洞爺湖ビジターセンターは、環境省が整備した施設です。洞爺湖周辺の自然についてパネルや空中写真などで紹介されていて、ゆったりとした空間です。この施設の中に火山科学館があり、有珠山噴火の状況を視覚・聴覚・振動によって体感できるようになっています。

洞爺湖の南側に位置する有珠山は現在も活動する活火山で、最近では1977年（昭和52年）と2000年

（平成12年）に噴火しました。

このような噴火による火山灰や火砕流で森林を失ってしまった山は、100年たつてようやく元の姿に回復するといえます。いっぽう今の洞爺湖温泉は100年前の火山活動の余熱により湧いていて、火山から受ける被害と恵みの両方があります。

それゆえ地域の中には、次のように考える人も多いそうです。「観光や温泉など、有珠山による恵みを受けているのだから、30年周期の噴火を受け入れていくことも必要である」つまり有珠山と共存していく考え方がしっかりと定まっているのです。このような地域の人たちの日頃の意識の高さに感心させられます。

そしてこのことは、科学者と住民の信頼関係にもつながっていて、2000年の噴火では科学者の適切な助言を受け、住民もその意見を良く聞きました。さらに行政、報道機関などの連携によって、ひとりの死傷者をだすこともなく避難が完了したのです。

○ 善光寺

有珠山から数kmのところ善光寺があります。この寺院は1804年に、「^{あつけし}厚岸の^{こくたいじ}国泰寺」と「^{とうじゅいん}様似の^{えぞさんかんじ}等潮院」とともに蝦夷三官寺に指定されました。

蝦夷三官寺は、徳川幕府が指定したもので、アイヌ民族を日本側につなぎとめることが目的のひとつです。当時の背景として外国船が蝦夷地（北海道）近海にあらわれるようになり、仏教を定着させて外国の教えが入り込むのを防ぐねらいがあったようです。

善光寺は天然の良港（入り江）に面しており、地理的に優位な場所ゆえに三官寺に指定されたと考えられます（国泰寺も天然の良港に面しています）。



善光寺



迎賓館

○ 伊達市開拓記念館

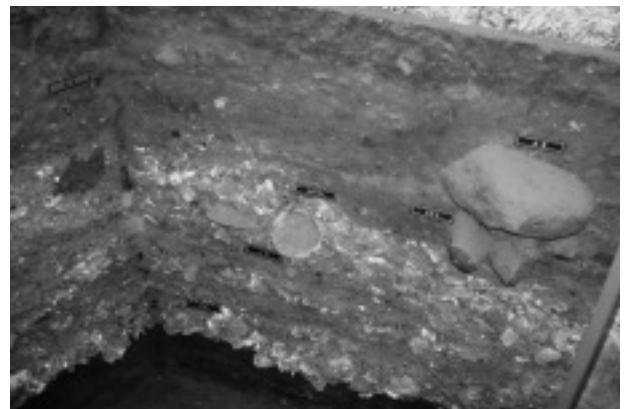
善光寺を見学した後に伊達市開拓記念館にむかいました。仙台藩の伊達家は鎌倉時代から血脈が続いている大名で、その重臣には11門17家がありました。このうち亙理領の伊達氏が1870年（明治3年）から9回にわたって、この地（胆振国の有珠郡）に移住してきました。それは明治政府の政策として、ロシア南下に対する警備と北海道の開拓を命ぜられたためです。伊達市開拓記念館の敷地は、かつての伊達家の敷地であり、ここを拠点として開拓が進められました。

開拓記念館に展示されているものは、伊達家が1956年に市に寄付したものです。江戸時代260年間のひな人形や、蒔絵（漆に金粉をほどこし磨いて仕上げたもの）の漆器類、着物、書、貝合わせ（嫁入り道具）等があり、すべて仙台から持ってきたものです。なかには葵の文の漆器類もあり徳川家出身の奥方が持ってきたものといえます。また書籍類は約1,000点におよび、学術的に価値のあるものも多いそうです。竹に雀（亙理伊達家の家紋）を装飾した蒔絵の漆器は、当時の伊達家の繁栄ぶりを思わせます。また開拓のための農具類も保管されています。

次に同じ敷地内にある迎賓館を訪ねました。この建物は伊達邦成が開拓の功績を認められ男爵の位を与えられたのを記念に1892年（明治25年）に建てたもので、おもに政府の高官を迎える時に利用されました。内部は和洋折衷になっていて、当時のままの建物なので風格があります。窓ガラスの中には当時のものも残っており、中から外を見たときに、風景がゆがんで見えて年代を感じさせました。

○北黄金貝塚

北黄金貝塚は今から5000年前から6000年前（縄文時代）の遺跡で、土器・石器・すり石・人骨などが発見されています。



貝塚の断面

貝塚が保存されている箇所の近くの北黄金貝塚情報センターを見学しました。館内は貝塚の様子（断面）が観察できるようになっていて、ハマグリの貝などが確認できます。この貝は暖かい海にしか生息しないことが知られているので、当時は温暖な気候であったことがわかります。

発掘の進捗率が全体の3%程度であるにも関わらず、14体もの人骨が発見されました。これらの人骨は札幌医科大学に保管されています。貝塚を掘って人を埋葬した形跡があり、貝塚はゴミ捨て場ではなく墓であったと考えられています。通常、人骨や動物のつもの製の道具は酸性土壌によって腐食が進み残されていません。しかし、これらが貝塚の中にある場合は、貝に含まれるカルシウム分の作用によって

腐食しないで残ります。その当時は人骨の保存のことを考えて貝塚の中に埋葬したわけではないのですが、結果とし当時の人の骨格を知ることができるのです。

また、すり石などは使い終わると、石を壊して魂を抜いた形跡があり、命（魂）があつたものを送るという考え方があつたようです。すなわち、ものには魂があるという思想はすでに縄文時代からあつたと考えられています。

○ アイヌ民族博物館（ポロトコタン）

北海道の地名の多くはアイヌ語を語源としていることからわかるように、アイヌ民族は北海道における先住民族です。ゆえに北海道の歴史において、アイヌ民族の文化を学ぶことはかせません。このため2日目は白老にあるアイヌ民族博物館を見学しました。

博物館は、財団法人が所有・運営しているもので、公的支援を受けていません。職員の7割がアイヌ民族であり、世界的にみても民族独自の運営している博物館はめずらしいということです。それまで白老の市街地にあつたアイヌ集落を、1965年にポロト湖畔に移設し施設を整備したものです。博物館はポロ・ト・コタンの呼び名で親しまれて、これは「大きな湖の近くにある集落」という意味です。ここには、元北海道大学教授の児玉作左衛門氏さくざえもんが私費を投じて収集した民族衣装などが展示されています。



古式舞踊

従来、アイヌ民族は自然の中に生きる人たちだと考えられていました。近年これに加えて、交易の民族としての側面があるという学説が有力になってき

ています。例えば、和人との交易で漆器類を、大陸の民族との交易で中国清朝の錦などを得ていました。この漆器類を多くもっている家ほど裕福であり、まわりから尊敬されていました。

チセ（住居）のなかのいろりは一年中燃やし続けることにより、雨よけや虫よけになり建物が長持ちします。チセは昭和初期まで実際の住居として存在していましたが、現在では再現されたものが文化施設または保存施設として維持されています。特にここでのチセは、アイヌ古式舞踊を公演するために、当時のものの3倍～4倍程度の広さにつくられています。

そして、このチセの中で古式舞踊の公演を見学しました。舞踊は伝統的な弦楽器トンコリの伴奏で、熊の霊送りの踊り・子守歌・鶴の舞・剣の舞など、北海道の大自然を思わせる厳かで雄大なものです。また、口で演奏する弦楽器（口琴こうきん）は人間の喜怒哀楽をあらわすもので、美しさと力強さを感じさせるものでした。白老で伝承するアイヌ古式舞踊は、1984年に国の重要無形民族文化財に指定され保存につとめています。

今後の博物の方針は従来の観光に加えて、教育にも力を入れていくということでした。

○ 白老元陣屋

徳川幕府が1854年に日米和親条約を1855年に日露和親条約を結んだことにより、下田と箱館（函館）が開港になります。このような状況のなかでロシアの南下がますますひっ迫したものとなり、対応策として幕府は南部藩や秋田藩などの各藩に命じて蝦夷地の警備にあたらせました。仙台藩は、白老からえりも岬・国後・択捉島までの東蝦夷地一帯を担当し、1856年（安政3年）に防御のための堀と土手をめぐらせて陣屋を築きます。本拠地となる元陣屋もとじんやが白老におかれ、支所となる出張陣屋でばりじんやが択捉島などの5箇所に置かれています。1868年（明治元年）の明治維新まで12年間任務にあたりましたが、慣れない北の地での仕事は相当の苦労があつたことと思います。

つまり、仙台藩は明治元年までは幕府の命により蝦夷地（北海道）の警備にあたり、明治3年からも新政府の命により北海道の開拓・警備にあつたことになります。このことから、仙台藩は北海道との関

係がとても深く、北海道の開拓に大きく貢献したといえます。

○ 白鳥大橋

今回のツアーの、締めくくりに白鳥大橋を見学しました。白鳥大橋の南側のたもとに道の駅「みたら」があります。このなかに白鳥大橋記念館があり、施工順序を紹介したパネルや、橋の模型が展示されています。白鳥大橋は1998年に完成した自動車専用道路の吊橋で、室蘭港の北側と南側をつないで都市の環状道路を形成し地域発展に寄与しています。



白鳥大橋

橋長1,380m(中央径間720m)の上部構造の規模も日本有数であります、下部構造(主塔基礎)の地中連続壁の深さは世界的にも前例のない規模になりました。主塔基礎の施工概要は次のとおりです。

- ①築島締切 主塔基礎の施工スペースを確保するために人工島をつくります。このため海底地盤を改良し、平面的に円形に鋼管矢板で締め切ります。
- ②築島中詰 鋼管矢板の内側の海水部分を、埋め立てると人工島があらわれます。通常は土砂で置き換えますが、ここでは石炭灰スラリーが採用されました。これは、火山灰、石炭の焼却灰、セメント、海水を混合したものです。この材料は自硬性があるため、鋼管矢板にかかる側圧を大幅に軽減できます。
- ③止水土留め壁 人工島のなかに基礎本体を設置する前提として、連続地中壁工法にて直径37mの止水土留め壁を築造します。海面から-103mもの深さは今までに経験のない規模の工事であり、綿密な施工計画がたてられました。

④基礎本体 止水土留め壁の中を掘削しながら、逆巻き工法により本体コンクリートを打設します。なお止水土留め壁は、基礎本体としての強度は期待していません。

記念館を見学した後は、実際に白鳥大橋を車で渡りました。海上約70mの高さから太平洋と室蘭港をみた眺めはまさに絶景です。

4. おわりに

幕末から明治にかけて、北海道の警備は重要なテーマであり、また緊張した雰囲気だったのだと感じました。そして国内では明治維新という大きな節目があり、その中で継続してアイヌ民族と和人との関わりがあったことを知りました。今回は北海道における近世の歴史の一場面をかいま見た研修会でした。

中村先生との対話のなかで特に歴史学の基本の考え方を教えていただきました。

『史実(事実)として例えば3つの点がある場合に、これらの点を直線で結ぶと三角形になります。だからといって歴史の本質が三角形であるとは限りません。それは四角形かもしれない(別にもう1点が隠れているかもしれない)。または曲線で結んだ円かもしれない。事実のひとつですが、それをどう解釈するかによって、歴史は異なってきます。歴史を学ぶことは、史実とその解釈の絶え間ない対話といえることができます』

これを技術(例えば土木工学)に置き換えてみるとどうでしょう。この場合は、自然現象として見えている部分にどう関わるかによって対処方法が異なると考えられます。そして、それこそが歴史学と共通する部分だと理解できないでしょうか。

【歴史学】

【土木工学】

史実を観察して考察 ⇔ 現象を観察して考察

ゆえに技術者が歴史を学ぶ意味がここにあると考えます。つまり歴史から学ぶことは、どのように通常の業務をとらえるかということのヒントになると思うのです。道南技術士会の研修ツアーでは毎年「歴史」をテーマのひとつにしてきました。そして今回までの5回の開催のすべてに中村先生のご指導をいただいています。本当にありがとうございます。